

住まいじ新聞

大月人物伝 大月短大の名女学長 村越 洋子

日本ステンレス工業株式会社

発行/日本ステンレス工業株式会社

〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1

電話=0554-22-2500

FAX=0554-22-5234

Vol.147 2011

12月号

村越洋子は、昭和四十年四月一日、大月短期大学に専任講師として着任。以来、助教授、教授と昇格。平成十六年四月一日、大月短期大学の第九代学長に就任。平成二十二年三月末、定年退職。大月短期大学の女性教員第一号であり、その勤務は三十七年間に及んだ。

その功を評価され、平成二十二年五月、文部科学大臣より、『教育功労者』として表彰された。

『あなたは長年にわたり短期大学教育の発展に尽力し多大の功績を挙げられました。よって短期大学教育六十周年を記念するに当たりその功をたたえここに表彰します』文部科学大臣 川端達夫』と。

彼女の家は祖父の代から米穀業を営んでいた。米所新潟出身の祖父は、青雲の志を抱いて、東京新宿に居を構え米穀業を開業。家では種(たね)の若者を使用人に。菊ちゃん、梅ちゃん等と呼ばれた、行儀みならいを兼ねた姉やさんが、彼女の三人の兄達につき、ひのき造りの総二階家に住み、町の名士として活躍していた。

洋子の生まれた昭和十八年九月頃は、戦局が傾き、学徒動員も始り、世に『産めよ増やせよ』と

男子の出生が奨励された時代である。当時、方面委員(現民生委員)をしていた祖父は、その先頭にたって地域のために活動していた。

洋子は昭和十八年九月六日、父 古田島直作母 美恵子の、四番目の長女として東京新宿に生まれた。洋子の誕生を知つて一目散に産室にかけこんだ祖父の第一声が、なんだかだつたことをかかわらずと話していた。洋子は深く傷ついた。すでに三人の兄達がいるにもかかわらずと話していた。

この原体験が、大学時代の『婦人問題研究会』で『女子学生の就職問題を考える会』、そしてその後の『男女共同参画社会を作る活動』等の導火線になつたと彼女は云つている。

生まれた時から三人の兄達との男女共学だった洋子は、兄ちゃんと同じをモットーに、都立戸山高等学校、早稲田大学心理学専修を経て、お茶の水女子大学大学院へと進学。

大学院一年生の時、高校三年のクラスメートだつた村越邦男と結婚、三人の子どもを産み育てながらの、洋子の共働きの人生『なんだ坂こんな



無認可保育園と二ヶ所の保育園に託し、片道三時間かけて大学へ出勤した。初日、大月市役所で辞令を交付された時、当時の助役からなんだ、乳飲み子が二人もいて通いきれるのか。と懸念の言葉を云われた時、どんなことがあつても辞めない。

また、その頃から大月短大の将来構想の論議も問題が生じたら、その都様を知り得たことが、学生をこよなく愛することを要求される教員の資質の向上に多いに役立つたと語っている。

も相談可』として彼女たちに開放。前職がカウンセラーだった彼女は学生たちとの相談活動の中で、一人ひとりの学生の心模様を知り得たことが、学生をこよなく愛することを要求される教員の資質の向上に多いに役立つたと語っている。

やがて、その特別聴講生として洋子の心理学を受講していた地域大月の一女性と出逢う。彼女は毎回、授業終了後、一冊のノートを持参して研究室に来室。洋子はその近所の少年との心の交換ノートを基に、子どもたちの教育問題について語り合う。そして、彼女の属するグループにより、教育を語り合う集い、子どもまつり、異年齢の市民の集い等の集会に発展。それらの集会を通して、洋子は多くの市民と知り合い、大月短大生は都留文科大学生と交流を深めていった。

その女性は、その後牛乳パックの再利用で国内外で活躍した平井初美さん。洋子は彼女によって、二文字としての地域ではなく、そこに住む人々を通じての地域を教えられたといつていて。

以後、学長になつてから洋子は、横浜に夫を残し大月に単身赴任。つまり、衣食住を大月に託し、身も心も大月をいとおしむようになった。

そしてその頃から、入学式の学長式辞の最後に「私たち教職員は皆さんのお援護です。そして市長さんをはじめ大月市民

誓つたことを今でも覚えていると彼女は語っています。大月短大創立二十年頃の当時、女子学生が急増し、定員を百名から五百十名へと変更。一方、女子学生の悩み相談も増加。唯一の女性教員だった洋子は、研究室を『いつで

入』(一般の聴講生は有料、大月市民は無料)二つめは『郡内研究室の設

置』(現地域研究室)三つめは『市民のための相談室の開設』(税務・法律・教育の各相談)である。

やがて、その特別聴講生として洋子の心理学を受講していた地域大月の一女性と出逢う。彼女は毎回、授業終了後、一冊のノートを持参して研究室に来室。洋子はその近所の少年との心の交換ノートを基に、子どもたちの教育問題について語り合う。そして、彼女の属するグループにより、教育を語り合う集い、子どもまつり、異年齢の市民の集い等の集会に発展。それらの集会を通して、洋子は多くの市民と知り合い、大月短大生は都留文科大学生と交流を深めていた。

その女性は、その後牛乳パックの再利用で国内外で活躍した平井初美さん。洋子は彼女によって、二文字としての地域ではなく、そこに住む人々を通じての地域を教えられたといつていて。

以後、学長になつてから洋子は、横浜に夫を残し大月に単身赴任。つまり、衣食住を大月に託し、身も心も大月をいとおしむようになった。

そしてその頃から、入学式の学長式辞の最後に

執筆者 参考資料 資料提供

本人 星野喜忠

武道一筋の猛者

伊藤 智治

智治は、大月警察署に勤務していた父、伊藤清治、母まつ代の二男として、昭和二十三年九月二十一日に大月町で生まれた。父は、長い闘病生活のすえ、悲しいことに昭和三十四年二月二十五日東京大学病院で亡くなつた。（享年四十二歳）

彼は小学校時代は、弟と新聞配達をして、中学からは、牛乳配達をしながら学校に通つた。剣道は父の勧めで、小学三年から大月警察署で始めたが当時は防具を買えなくて、朝六時の寒稽古が始まるのに、早く行かないと防具が無くなるので、朝四時から新聞配達をして、約一ヶ月間の寒稽古に通つて、皆勤賞をもらつた。

剣道をやりたい為、母に無理押しに頼み牛乳配達を二人分やり、都留高校に行かせてもらった。

良きメンバーと巡り合い、各種大会に活躍できた。ただ、合宿の時が、朝早く抜けて牛乳配達をやるのが、一番辛かつた。

試合も思うようにいかず、随分苦労したものだが、何時かは、強くなりたいと思いつ常に人の三倍は練習しなければと、毎日の素振りは欠かさなかつた。こうして、高校卒業時に、剣道三段になつた。（当時、県で、三人であった）卒業する時、仕事をしながら剣道が出来る警察を希望し、これは父の願いでもあつた警視庁を

受験し合格した。
昭和四十二年三月八日、中野の警察学校へ入校して一ヶ月後、千名近い全校生徒の中から、約二十名の剣道特別練習員の中に選ばれた。
全国から集まつた選手は、インターハイ等それぞれ皆実績を持つてゐる人たちばかりであつた。それからは毎日素振りをやり、日曜の外出も早めに帰り、仲間を誘い稽古に集中した日々だった。

導者としての勉強、指導法各種古流の形等を学ぶのである。その担当者が、日本を代表する先生で、教師が佐藤博信先生（後に首席師範）、師範が、阿部三郎先生であった。

武道専科を卒業してから剣道特練（二十五名）に入った。稽古は毎日、朝稽古、午前、午後の稽古とあり、それは厳しいものであった。

その中には、全日本剣道選手権大会での優勝者が五



も満票をもらっていたので
自信を持って臨んだが見事
一次で落ちてしまつた。
それから三年後、平成十
年、四十九歳で念願の八段
に合格をした。この落ちた
三年間は、稽古に次ぐ稽古
で筆舌に尽くしがたい毎日
であつた。

平成十二年に逮捕術指導
室の主席師範を拝命される
が、剣道指導室と違い、稽
古は朝稽古だけしか出来な
く、日中は逮捕術の研究若
しくは会議、巡回指導の毎

来られたのは、まさに夢のようである。少年時代の上先生との出会い、また、苦学の経験が、上京して仕事を終えてから、夜学に通い、しかも剣道を続けて来られたのだと思うといつてゐる。

全国には、強い剣士が沢山いた。彼は決して器用ではなく、むしろ不器用だったので、努力を積む精神力が、身についていたのだと話していた。

在職中は、剣道では、今

過ぎれば楽しい事しか残っていないのが、現状である。これからも日々精進し、剣道を通して少しでも社会に恩返しが出来るよう微力ながら、汗を流していきたいと彼は言っている。

学校時代は剣道教室対抗試合に優勝したり、中野区民剣道大会で、個人優勝したりして、益々、剣道に意欲が出てきた時であつた。卒業する前に、警視庁には剣道・柔道の指導者制度があり、強ければその道に進むことが出来る事を知った。各警察署機動隊には、柔道、剣道の指導者（助教各百五十名）が、各一人ずついて、署員を指導しており、また助教の指導を行う

全国から集まつた選手は、インターハイ等それぞれ皆実績を持つてゐる人たちばかりであつた。それからは毎日素振りをやり、日曜の外出も早めに帰り、仲間を誘い稽古に集中した日々だった。

と狹き門であつた。（毎年
六、八名しか採用しない）
四月に武道専科に入校し
て、ここで一年間指導者と
して、訓練は勿論の事、指

剣道八段の受審方法が平成七年に変わり、年齢が四十六歳で受験資格が出たので挑戦することにした。その頃、予備審査があり何時前から、井上一男先生（後の山梨県教育委員長）は毎年必ず剣道が必要になる。その為にも、指導者の育成が大事である。と常々話されて、ここへつて来る。この大会で、優勝した。

受験し合格した。
昭和四十二年三月八日、
中野の警察学校へ入校して
一ヶ月後、千名近い全校生
徒の中から、約二十名の剣
道特別練習員の中に選ばれ

生がいて、無理にお願いし勤務の休みの日に、警視庁武道館の朝稽古に通わせてもらった。次の年の二月、武道専科の試験に一番で合格した。当日は、百五十名

名もいて、それは最強軍団であり、ついていくのに必死だった。後に剣道教師になつて、念願の剣道指導室に入り、副主席師範になつたのが、三十九歳の時であ

日で、夜の時間が空いていたので勤務終了後居合の稽古に没頭した。また、休日には他県等の高名な先生を尋ね指導を受けたおかげで平成十四年居合道八段を取

日本剣道東西対抗試合、寛仁親王杯剣道八段選抜大会等八回出場、東京都の各種大会に出場した。